

## コメントD：湊吉正（国語科教育の立場からのまとめと問題点の指摘）

### 多様な研究方法による開拓

湊 本日はまとこにありがとうございました。午前中のセッションから今まで先生方の御報告、それからそれに対するコメント等ずっと拝聴してきまして、啓発されるところが非常に多く、今日は本当に私自身にとって大変貴重な一日だったな、という実感を持ちました。とてもまとめなどということはできませんけれども、感想のようなことを申し上げることで、お許しいただきたいと思えます。

このプロジェクトの大テーマは「日本人及び外国人に対する言語教育の統合的研究」ということで、それにアプローチするための3つの課題というものが立てられております。今日の発表やコメントを拝聴しておりまして、この3つの切り口というものが大変緊要なものである、ということに改めて印象づけられました。また、それに関連して、国語科教育の改善への方向づけとして、3つの点が掲げられておりますけれども、そのそれぞれにつきまして、それぞれの内部で力強く探究が進められている、ということを実感いたしました。

2番目でございますが、国語科教育に直接関わっていると思われまます報告につきまして、感想めいたものとして、寺井さんの御報告は、これはやはり一つの事例を取り上げた分析的な研究の一つの行き方を示されたものというふうに感じました。それから、棚橋さんの御報告は、資料を丹念に調査してそれを検討して新しい特徴を見出していくという調査的研究の一つの方法を適応されているな、と思いました。それから、上谷さんの御報告と安さんの御報告は、共に比較的研究というもので、大変貴重な比較的研究の実例を示してくださったように思います。それから、甲斐雄一郎さんの御報告につきましては、やはり私は研究方法としては歴史的研究にポイントがあるかな、と感じました。以上のように研究方法の上で、事例的研究、それから調査的研究、比較的研究、歴史的研究、こういうふうな多様な研究方法によって、それぞれの領域を開拓されておられる、そういう実際の研究の今、現に進行している姿というものを把握することができまして、大変心強く感じました。それぞれの御研究は、まだこれからさらに深められたり、広げられたりしていくべきものだと思いますが、さらに一段とそういうことでまとまったものになっていく、そういう期待感を抱かせるものがありまして、これからさらに御研究が発展していかれることを期待しております。

### 国語科の分節的な構造化

3番目でございますが、これは私は今日いただいたことのみありまして、私としては大変ありがたかったですけれども、今度は私なりに本プロジェクトに少しでも貢献すべきものはないか、ということで、そこに2つの項目について記させていただきました。1つは、甲斐雄一郎さんも指摘されておりましたように、国語科というものにつきましても、独自の歴史というものがありますが、明治、大正、昭和から平成の現在にいたる教科とし

での発展の歴史的流れの上に立ちつつ、さらにこれからの発展を見通すべき展望の中で、教科としての歴史の分節的な構造化というものを、あるいは科目構成の基準的事項というものを考えた場合に、一つの観点から概略的に見て次の7項を挙げるができる、というようなことで7つ列記させていただきました(資料1)。これから国語科の分節的な構造化というものを考えていく上で、これらのどこに重点が置かれるかによって特徴的なものになっていくのかな、という感じは持っております。

### **学校言語の中で形成される慣用文体**

それから、2つ目のところですけども、これは学校言語の中で形成される慣用文体をめぐるとの問題です。慣用文体というふうについていいのか、あるいはレジスターというか言語使用域というふうに捉えていいものか、その辺りは難しいところですが、乳幼児期から学童期に入っていくと、そこで子どもが学校という場でやはり新しいことばというものに接して、自分の中にそれまで経験しなかった新しいことばの体系を獲得していかなければならない。それを簡単に学校言語というように表現できると思います。それを慣用文体、あるいは言語使用域といいますか、そういう面から見ますと、そこにありますような表で、(表1)話しことばでいえば、主として家庭内の談話体だけで生活していたところに、学校という場で新しい口語体に接することになる。その辺りのところをこれからアプローチしていく視点もあるかな、というふうに感じました。どうも今日はありがとうございました。

資料1 国語科の分節的構造をめぐって

話す、書く、聞く、読むの言語活動の四形態。また、それに直結するものとしての表現活動と理解活動、言語能力としての表現力と理解力。

国語科の内容構成の中心的流れをなしてきた講読・読むこと。さらには、読書活動・読書生活、辞書・参考資料等の活用、高度情報化社会における言語関連の情報機器の活用。

主として講読教材の大きなジャンルとしての古典と現代文、古典の中の古文と漢文。さらには、文学と非文学等。

文章表現、作文。特に、発想力、構想力の開発に資する表現活動。

談話、討議・討論。特に、効果的な自己表現力、相手に対する説得力の開発に資する表現活動。

文法・文体、語句・語彙、漢字・漢語、その他の国語要素的事項。

言語を媒介とする身体内活動としての認識・思考・感情等と、言語を媒介とする身体間活動としてのコミュニケーションにかかわる諸相。さらに、それらを包含した典型的な言語生活の場面にかかわる諸事項。

表1 現代の慣用文体の12の標識

| 言語資料  | 語体 | 文語体(L) | 口語体(C) | 談話体(S) | 内言体(I) |
|-------|----|--------|--------|--------|--------|
| 心ことば  |    |        |        |        |        |
| 話しことば |    |        |        |        |        |
| 書きことば |    |        |        |        |        |

12の標識の場所はすべて または で示した。 は四つの語体のそれぞれにおける拠点の場所を示したものである。

参考資料

魚返善雄(1963)『言語と文体』(紀伊国屋書店18「語体のLCS」の記述。)

岩淵悦太郎(1958)「言語生活の変遷」『講座現代国語学 ことばの変化』筑摩書房 132頁

早川勝広(1986)『小学1年生のことばとの出会い』19-21頁 日本書籍

